

平家語りにおける終止感について

——平曲〈下り〉〈中音〉の墨譜の検討——

鈴木孝庸

はじめに

平家物語は、全十二巻にわたる長い叙述が、百数十ほどに区切られている。〈琵琶語り〉の場では、それぞれ区切られた一単位（「祇園精舎」「忠度都落」「那須与一」などの章段。句）を取り出し、または数句を組み合わせて語る。その区切り方は、ことば（説話内容、文章表現）と音楽（曲節）との対応を勘案して行われたように、現存の平曲譜本を見るかぎりでは、ほぼ固定している。

一章段（一句）はまた、いくつかの小さな話柄の組み合わせで出来ているわけだが、その小さな単位とその部分部分を扱う曲節との対応関係は、それぞれが完全に対応一致する場合は少ない。各小部分と曲節は重なりながらも、互いに少しずつずれる。そのような関係で〈語り〉は進みながら、一句の終わりでは合流し完結するのである。

また、一句の中で複数の曲節が使用されるが、それぞれの曲節は、それぞれの終わりでは一定の終止が感じられるような節付け（墨譜^{はかせ}）になっている。

ところで、平曲の曲節のうちの〈三重〉^{さんじゆう}〈下り〉^{くだ}とその曲節で扱う「ことば部分」とは、対応関係がずれず比較的安定しているのだが、終わり方について言えば、終止感にいささかも足りないような感じを与える墨譜を配分している例がある。

本稿は、そのような、曲節の終止部の墨譜の在り方を検討する。これは〈語り〉の一単位の固定性の問題すなわち平家物語の区切り方が固定化していく傾向を文学的音楽的に考えようとのねらいに基づくものである。

一 問題の発端

始まりは、私に「小宰相」（平家物語巻第九、平家正節^{まおし}十四ノ下）を語る計画があり、しかし、一句をすべて語るための時間がとれないことからであった。他の句（このたびは「敦盛最期」一句）との組み合わせで行おうと考えて、敦盛は一句のすべてを語るが、小宰相は一句のまとまりの中の一部分を取り出して語ろうと考えたのである。ところで、「小宰相」は何と言つても一の谷から屋島へ渡る船中の話（身投げに至るまでの乳母とのやりとりとすきをみての身投げ、そして水葬）が中心となる話柄である。しかしこれを語るための時間を用意することは出来ない。やむなく、そのあとに記される通盛とのなれそめ話は、つけたしであるが短めの時間を確保出来てしかもそれなりに話がまとまっている。このため、この後半を語ることにしたのであった。

ここまではまず大きな問題はないのだが、具体的にどこから始めるのかを判断することから問題が現れてくる。お話の中味と曲節との関係が、完成された一句から分断するとなれば、まず語り始めの曲節が問題になってくる。これが、「小宰相」の場合、内容をかりに次のように、

a 通盛戦死の報、小宰相にもたらされる、

b 屋島へ渡る平家敗走船団の中の出来事、小宰相の入水、水葬、

c 通盛と小宰相とのなれそめ

d 教盛の落胆

とまとめるならば、cを取りだして語ろうとすると、その始まりの

抑此女房と申すは頭の刑部卿憲方の娘上西門院の衆宮中一チの美人名をば小宰相の局とぞ申しける此女房十六と申しし……

の曲節は、〈白声〉^{しやうせい}となつてゐる。そうすると、〈語り〉の内容は小宰相の紹介からだからまったく問題はないのだが、〈語り〉の曲節が〈口説〉^{くどき}でなく〈白声〉であるため扱いにくいのである。後述するように平曲の〈語り始め〉はほとんど〈口説〉からであつて、〈白声〉から始まる句はない。但し〈白声〉と〈口説〉は墨譜が近いので、〈白声〉を〈口説〉に変えることには、〈語り〉の技法・作法としてまったく問題なし。しかし、実はかなり平曲のことばの抑揚等に習熟していないと、「変換」がぎこちないことになり、自然な〈語り〉にならないのである。これは私の経験上わかっていることである。そこで、cの冒頭の〈白声〉部分を、すべて〈口説〉にすることや最初は〈口説〉にして残りを〈白声〉にするなどという「変換」はしないこととし、話のまともまりには欠けることになるものの、bの終わりの方で〈口説〉の曲節が配分されている箇所から語り始めるという処理にした。

さて、本稿で問題にしようと考えているのは、語り始め・語り起こしの曲節とことばの問題ではない。始まりではなく「終わり」の在り方、「終止感」の表現についてである。

「小宰相」を c を中心に語ろうとして、開始部分を少し前からするのはやむを得ぬ処理として、次の問題は、d を付随させて語るとするなら c からの流れ、また a、b、c と流れて来たとしても、内容的に d はいささか唐突だと私は思う。教盛の嘆きは、通盛をはじめ子息を二人亡くしただけでなく小宰相までも…と、それ以前の話の中にはほとんど登場しない教盛のことが語られて「小宰相」一句が閉じられるのだが、「小宰相」一句（まるごと）語るのならともかくとして、私はなれそめ話を取りだして語ろうというのであるから、d はカットしてよかろうと考えた。ここを曲節との関係で表示すると、

c	イ	…省略…
	ロ	上西門院による返歌 〈上哥〉 <small>かみうた</small>
	ハ	通盛の感情の高まり 〈三重〉 <small>さんじゆう</small>
	ニ	二人はひとつ道に 〈下り〉 <small>くだ</small>
d	ホ	教盛の嘆き 〈初重〉—〈初中〉 <small>しよじゆう</small>

となっている。この c d の場合、曲節は内容と対応するように配分されているから、d をそのままカットすることに問題はないと判断できるのである。ところが、まことに微細なことと思われるだろうが、d を切り離して、c の二まででひとまとまりにして語ろうとすると、この部分の最後の最後がなんとなく落ち着かないのであった。

ひとまとまりの平曲を語る時、曲節の側から言えば、

- 語り始めは、ほほ〈口説〉か〈中音〉であり、
 ○ 語り収めは、ほほ〈中音〉か〈初重〉か〈拾〉である。注1

「小宰相」から「なれそめ」部分（c）を取り出して語ると、終わりの曲節は〈下り〉で、これは〈中音〉と同じであるから、何の問題もないように考えられる。ところが、ここから微細部分になるのだが、墨譜が違うのである。

問題の箇所は、末尾の二音字だが、その前から引用する。右にまとめたcのハと二である。

三重甲 むねの間ダのおもひはふじの烟リとあらはれ袖のうへのなみだは**上**清見が関のなみなりや

甲 眉目は幸イの花なれば**上**三位此女房を給はつてたがひの心ざし浅からず

下り されば西海の浪のうへ船の中までも引ぐして終にひとつ道へぞおもむかれける

墨譜はかせの引用は、ことばの文節末に付されているものだけを出して、文末の「おもむかれける」はすべての墨譜にしている。「**ム**」「**コ**」「**コ**」「**コ**」「**コ**」「**リ**」「**リ**」といった節付けは、それぞれ文節末のことばを強調したり音を確認し落ち着かせる働きがある。しかし、これらは一時休止的な終止感は表現するものの、完全な終止表現ではない。一旦音を落ち着かせてさらにその先に続いていくことを予想させる（続くことを前提とする）技法の墨譜なのである。そのことをふまえて言うならば、「おもむかれける」の末尾「ける」が「**ム**」「**コ**」となっているのは、〈語り〉がさらに続くような気分で終止することになるのである。——もっとも、このことは譜本を見ていて気づいたのではなく、実際に語ってみて、完全な終止にならない

ことに気づいたのが最初で、説明してみれば、右のようなことになると考えられる。

では、どのような節付け（墨譜の配分）ならば、完全な終止感が得られるのかと言えば、私案を出すならば、「おもむかれける」は「下り」すなわち広い括りでは〈中音〉の末尾であるから、

おもむかれける

などが考えられる。最末尾の「る」が「へ」^{（入り）}で、その直前の「け」が「う」^{（大廻し）}であるのが、通例の〈中音〉の閉じ方である。音を琵琶の押さえ所で示し、黄鐘（A）を中心音とする調子の音名で言うならば、この末尾の「うへ」の音の動きは、次の通りである。

う…^{（第二絃）}二—三^{（第二柱）}（平調E）^{（ひょうじょう）}から一—二（盤渉H）^{（ばんしき）}に下げ、そのうち盤渉から平調への上げ下げを三回行い盤渉に落ち着かせる。^{注2}

へ…一—二（盤渉H）から二—三（平調E）に上げて、一—二（盤渉）に落ち着かせる。完全四度の上げ下げである。^{注3}

すなわち、一—二は、楽器・琵琶の最低音ではないが（最低音は、一—〇。第一絃の開放音）、平曲の音のさまざまな展開のちに落ち着く先の最も低い音である。終止感はこの音に収められることで表現されると言ってよい。

ところが、このたび気づいた「ム」の場合は、次の通りである。

ム…二—三（平調E）から三—五（盤渉H）に上げて二—三（平調）に下げる。これを三回繰り返す。完全五度の上げ下げである。

ㄥ… 二―三（平調E）から一―二（盤渉H）に下げて、そのち一―二（盤渉）と二―三（平調）の上げ下げを二回行い、二―三（平調）に落ち着かせる。完全四度の上げ下げである。

すなわち、こちらの場合は、最後は高い方の音に収められるのである。しかも、この第二絃第三柱の音は、平曲の低音域の中心の音であり、語り始めの音と言ってもよい音である。ㄥの墨譜で曲節をしめくくろうとすると、低く終わる感じになるのではなく、逆に、ふたたび最初に回歸してしまうのである。

以上、「小宰相」の〈下り〉の末尾が、内容および言葉づかいからは、ひとまとまりになっているものの、墨譜の在り方から言えば、終止の形にならないことを述べた。

- ・〈下り〉（ないし〈中音〉の場合でも）末尾の基本が、**うへ**であること、
- ・墨譜が **ㄥ** などでは、完全な終止感に至らないこと、

について、譜本全体の中でみて、この先で確認をする。

これが問題の出発点である。

二 〈下り〉の末尾の墨譜

「小宰相」の、〈三重〉―〈下り〉と続く曲節配分の〈下り〉の末尾が、通例の〈下り〉とやや異なる印象を与える墨譜になっているのではないかということを、私自身の経験をもとに、予測をたててみたのだが、ここでは、そのことを譜本『平家正節』全体の中での在り方をもとに確認する。用いた『平家正節』は尾崎家本

（大学堂書店刊の影印本による）である。

二―「下り」の数

〈下り〉は、必ず「三重」に付随する曲節である。「三重」は必ず「下り」を伴うとは限らないが、〈下り〉という名称の曲節（実質は〈中音〉だが）は、「三重」の後でなければならない。

『平家正節』では、「三重」―〈下り〉として出て来るのは、次の通りである。（一）内の数字は、一句の中で複数回現れる場合の数である。句の順は、『平家正節』の順によっている。なお、〈下り〉と表記すべきところを〈下ケ〉としている例があるが個別に注記しないことにする。

鱸、卒都婆流、月見（2）、紅葉、竹生嶋詣、宇佐行幸、海道下（2）、奈須与市、蘓武、足摺（2）、青山、横笛、少将都還（2）、高倉宮蘭城寺入御、宇治川、大嘗会沙汰、先帝御入水、平大納言被流、二代后、一行阿闍梨、金渡、小督（2）、老馬、熊野参詣、内侍所都入、嚴島御幸、咸陽宮、喘涸聲、福原落、千壽、新大納言被流、有王島下、宮御最期、五節沙汰、実盛最期、木曾最期、藤戸、大地震、我身榮華（2）、烽火、東国下向、火燧合戦、惟盛入水、重衡被斬、少将乞請、落足、六代被斬、主上都落、太宰府落（2）、鹿谷、山門滅亡（2）、大臣流罪、若宮御出家、六代乞受、妓王（3）、願立、座主流（2）、小教訓（2）、新大納言死去、僧都死去、入道逝去、聖主臨幸、一門都落、瀬尾最期、法住寺合戦、小朝拝、樋口被斬、重衡生捕、小宰相（2）、内裏女房、三日平氏、一門大路被渡、副将被斬、大臣殿誅罰、勧進帳、高野卷、城南離宮（2）、三井寺炎上、奈良炎上、三草勢揃、女院御出家、小原入御、小原御幸（2）、六道、御往生、新都（間の物）、木曾願書（間の物）、祇園精舎、延喜聖代、宗論、劔之卷、鏡之卷、八坂

流訪月、

以上、93句¹⁰⁸箇所である。この数は〈下り〉に注目して出しているが、同時に〈三重〉の登場回数にもなっている。但し、〈三重〉は、必ず〈下り〉を伴うわけではない。〈三重〉のあと〈下り〉以外の曲節につながっていく場合もある。そのような〈三重〉の登場する句を挙げておく。次の18句である。このうち、〈三重〉が複数回登場し、〈下り〉を伴う場合も含む句（すなわち右の一覧に既に挙がっている5句には傍線をした）。

鶴、額打論、那都羅、鵜河合戦、小松教訓、嚴島御幸、咸陽宮、烽火、競、惟盛都落、醫師問答、主上都落、慈心坊、許文、都遷、清水炎上、内裏炎上、八坂流訪月、

こうしてみると、〈三重〉の登場する句は、全部で106句である。『平家正節』の総句数は200句であるから、平家語りの半分に〈三重〉は登場するわけである。^{注4}

二―二 〈下り〉の末尾の墨譜の基本形

前項で確認した108箇所の〈下り〉のうち、

①、末尾の墨譜でもっとも多いのはうへで、95箇所である。

ほとんど定型的に〈下り〉の末尾は、この墨譜であることが確認できる。なお、右の95のうち、

〈下り〉で一句全体が閉じられるのは、次の10句である。

海道下、蘓武、金渡、新大納言被流、少将乞請、太宰府落、内裏女房、高野卷、小原入御、小原御幸、

これらの句は、〈三重〉―〈下り〉という曲節で一句が語り収められるわけだが、いずれもうへで終わるのである。次項には④ではない形の〈下り〉の終わり方を③としてあげるが、この形で一句が閉じられることはない。終止感を表現する墨譜の基本がうへであることが理解されると思う。「一 問題の発端」で述べた、「小宰相」の中の話を取り出す際に私が感じたことの根底に、終止の墨譜の「基本」があったことを確認したのである。

二―三 〈下り〉の末尾の墨譜の変化形

では、基本の形でないものは、どのような終わり方になっているのだろうか。

③、末尾の墨譜が④でないものは、次の13箇所である。

月見、宇佐行幸、奈須与市、大地震、我身榮華、烽火、願立、座主流、小宰相、城南離宮、小原御幸、新都、鏡之卷、

イ…伏見廣澤の月を見る
 口…薩摩の守忠度
 〔初重〕 …… (月見 44頁)
 〔上歌〕 …… (宇佐行幸 61頁)

⑤	④	③	②	①
□	ハ	ハ	モ	ハ
ウ	ハ	ハ	ハ	ハ
ル	ル	ル	ル	ル

ハ…はれならずと	呂	：	（奈須与市 76頁）
ニ…大地震なり	初重	：	（大地震 466頁）
ホ…闕たる事なし	初重	：	（我身栄華 474頁）
ヘ…見へたりける	初重	：	（烽火 483頁）
ト…かくれさせたまひぬ	初重	：	（願立 836頁）
チ…まいり向ふ	口説	：	（座主流 849頁）
リ…おもむかれける	初重	：	（小宰相 1065頁）
ヌ…史書の文にたがはず	初重	：	（城南離宮 1216頁）
ル…うき節しげき竹柱	初重	：	（小原御幸 1305頁）
ヲ…とふられけれ	初重	：	（新都間の物 1335頁）
ワ…折節	走三重	：	（鏡之巻 1388頁）

これらの末尾二音だけをあらためて見ると、次のような形になっている。

⑦	リ	□	…イロチ
⑥	□	□	…へ
⑤	ヲ		…リヲ

④は、へが最後であることで「基本形」に最も近い。③②①は、もまたはうで終わることで、最低音に落ち着く。⑦は、最後の音に墨譜がないが、「一ノ声」のような技法だと伝えられていて、最後の音は、盤渉（H）から黄鐘（A）に一旦下げてから盤渉に戻して終わるという落ち着かせ方である。これは〈初重〉の末尾の終わり方の基本と言ってもよい。⑥は、⑦に準じて把握してよいだろう。

以上、〈下り〉の末尾の基本形ではない13例のうち、④③②の11例は、墨譜の配分は異なるが一定の終止感を表現していると言つてよいのである。

問題は、やはり⑤ ヲ である。〈下り〉という曲節の中では（〈中音〉でも同様だが）、この墨譜は〈中ユリ〉と称される墨譜（音型。技法）で、ひとまとまりの〈下り〉の○中程で、内容的にも音楽的にも一区切りにするかのように〈中ユリ〉が配置されることがある。音楽的には、そこで音程の確認という働きもある。その点では、〈一ノ声〉〈二ノ声〉と似ているのである。^{注5} したがって、〈中ユリ〉は、中間的な位置での、次の語りに続くことを前提とする小休止的な役割はあるが、ひとつの曲節を収束する働きはないのである。

三 〈中音〉の末尾の墨譜

ここまでは、問題の出発点の「小宰相」の〈三重〉―〈下り〉の、〈下り〉の末尾が、ここでお話しを切り離そうとした時に、〈語り〉の具体相としての声遣い（墨譜）から判断すると、内容をもとにした判断だけでは切り離すことができないこと、小宰相と通盛のなれそめのお話しだけを取り出すことができないことを見てきたのである。そのことについて、〈下り〉の末尾の音の収め方（落ち着かせ方）の問題に大きく関わっていて、現行の平曲（具体的には譜本『平家正節』）の音楽体系をもとに考えてみると、簡単に切り離すことはできないのだということを指摘しておきたかったのである。

さて本節では、前節の検討に続く形で、〈下り〉から言えば本家に相当する〈中音〉の末尾がどのようなになっているのかの検討結果を報告する。〈中音〉の仲間には、〈初重中音〉〈初中〉という呼称でも登場するので、それらを含めて計算した。但し、結果は〈下り〉で分かったこととほぼ同様であるから、前節のように〈中音〉の登場する「句」名の掲出などは省略する。

〈中音〉〈初重中音〉〈初中〉の出る句 | 153句。（但し、この中には、「間の物」三句、「替節」二句を含むので、総句数としては、148句と言ってもよい。）

〈中音〉〈初重中音〉〈初中〉の登場箇所 | 354箇所

〈中音〉〈初重中音〉〈初中〉の末尾

[illegible]

この結果をみると、

 ㊦ ㊩
 □ ひ
 う う

・〈中音〉においても〈下り〉同様に末尾はうへが基本であること。

が確認できたことになる。そして、基本の墨譜でない場合は、

〈中ユリ〉〈一ノ声〉〈二ノ声〉は、ひとまとまりの〈中音〉〈初重中音〉〈初中〉にあつて、途中で現れるのが基本であり、小休止ではあるが完全な終止ではない。音も低音域の低音に収められない。

したがつて、㊦ ㊧ ㊨は、〈中音〉の曲節としては終わりだが、必ず別の曲節（呂）〈初重〉〈拾〉など）につながることを前提としての終止（休止）の墨譜であること。

が確認できたことになる。

なお、㊩の ㊦から㊨まですべてについての註釈は省略するが、比較的次数の多い例について言っておくならば、㊦ ひ ㊧ リ ㊨ は、〈下り〉のところで述べたように、この墨譜で終止表現になるとみてよいのである。

四 「小宰相」の〈下り〉末尾の墨譜

ここまで、〈中音〉および〈中音〉の仲間（〈下り〉〈初重中音〉〈初中〉）の曲節としての終わり方を検討してきた。その基本形を確認し、例外的な形についても判断したわけである。

その上で、出発点となった「小宰相」の〈下り〉末尾の在り方に戻ってみたい。

出発は『平家正節』の譜記であった。そこで他の譜本の譜記も併せて考える。精査に及ばなかったが、〈中音〉の末尾の墨譜を概観し、その上で「小宰相」の〈下り〉の末尾の墨譜を見るのである。但し、他の譜記では「形」がさまざまに異なっている。本稿ではその「形」を表示する準備がないので、それぞれの譜本でみて、「小宰相」の〈下り〉末尾が基本の墨譜と判断できるものは（基本墨譜）と記し、それと異なる場合は、（異例墨譜）と表示する。

- | | |
|-----------------|--------|
| ・ 豊川本（前田流譜本） | （基本墨譜） |
| ・ 吟譜（前田流譜本） | （異例墨譜） |
| ・ 光丘文庫本（前田流譜本） | （異例墨譜） |
| ・ 昭和女子大本（前田流譜本） | （異例墨譜） |
| ・ 秦音曲鈔（波多野流譜本） | （基本墨譜） |
| ・ 波多野流譜本 | （異例墨譜） |

この結果をみると、大勢は『平家正節』のように、「小宰相」の「なれそめ話」の末尾は、通例の墨譜で扱わ

ないことになっている。しかし、わずかではあるものの、豊川本や『秦音曲鈔』のように基本の墨譜になっているものもあった。この結果によって平家語りの新旧の在り方を全体のものとして言うまでには至らないが、

「基本形」と「変化形」が認められる場合に、〈語り〉の形として両方の伝承が（右の結果では流派による違いではない）あるのは、「基本形」が古い〈語り〉だと考えるのが自然ではなからうか。私は、この曲節が扱うことば・内容との関係で言うならば、この〈下り〉部分は、終止感を伴う通例の墨譜の方がふさわしいと考える。平曲の伝授においても、〈中音〉の基本が厳格に伝承されてきたと想定するならば、異例の節付けにはそれなりの「口伝」があったと想像できるのである。いまその「口伝」を確実にする材料はないが、想像で言うことが許されるならば、この〈下り〉部分はここで終止するのではなく、その次に語られる門脇宰相の嘆きに必ずつないでいかなければならないので、というような、文学的なまとまりを伴う「口伝」であったのであろう。文政三年（一八二〇）に、岡正武が京都の星野検校に平曲関係のことをいろいろ尋ねた結果が記されている『平曲問答書』（東京国立博物館蔵など）を見ると、「小宰相」のまさにこの箇所も質問の対象になっている。

同下り ひとつみちへそおもむかれける

右のふしにて宜か

これは岡の質問だけで、星野検校の答えが記されていないのはまことに残念だが、岡の質問は、〈中音〉の類の終わり方をふまえてのものだったと解釈できるのである。

「小宰相」の場合、

a 通盛戦死の報、小宰相にもたらされる、

b 屋島へ渡る平家敗走船団の中の出来事、小宰相の入水、水葬、

c 通盛と小宰相とのなれそめ

と進んできた話が、それほどの結びつきだったから、小宰相も通盛のあとを慕って古来稀な「入水自殺」をしたのだと結ぶ形もあり得たのである。現在諸譜本にみるような「一句のまとまり」の中で、その内部をさらに細かく分断して語っても良さそうな、そのような取り出しを許容する配慮が、曲節の末尾の墨譜からうかがうことができるのである。ところがほとんどの譜本では、そのあとの

d 教盛の落胆

まで語ることでは話を収束させる方向に変化した大きな「一句のまとまり」に固定したのである。「小宰相」への視点で語る話であったものが、通盛の父の視点を持ち出すことで、いわば複眼的な視点の〈語り〉になったということもできそうだ。しかし、この形を私はあまり肯定的に評価できるようには思わないのである。

小 括

本稿は、「小宰相」の中から「なれそめ」の部分を取り出して〈平家語り〉をしようと考えた時に感じたことを出発点として、

・〈中音〉の類の終わり方の基本形の確認

を行い、

・異例、変化形の場合の次の曲節への連動性の確認

を行い、ふたたび出発点に戻って、

・「小宰相」の「なれそめ」部分の扱い方に二通りの形が考えられることを述べたのである。

こうした検討は、

平家物語のことは・内容のまとまり と 曲節の配分・墨譜の付与 との関係

を考えようとの問題意識につながっていく。本稿はごくごく微細な箇所を取りあげてみたのであるが、〈語り〉の基本についての再検討にもなったことでもあり、現存平曲譜本の句（章段）の立て方（区切り方）をもとにしながら、もう少し違った区切り方あるいは少し小さなまとまりでの〈語り〉の在り方を、内容だけで判断するのではなく、曲節との結びつきの上で考えることができるのではないかという方向を示してみたのである。

注

- 1 拙著『平曲と平家物語』（新潟大学人文学部研究叢書2。二〇〇七。知泉書館）142頁）
- 2 なおうは、三回の上げ下げは完全四度の上げ下げだが、三回目は完全五度で上げ下げをする場合がある。今問題にしている曲節の終結部の場合は、完全四度である。
- 3 なおへは、完全四度で上げて、上げた音から完全五度で下げる場合があるが、ここの曲節の末尾の場合は、完全四度の上げ下げである。
- 4 厳密に言えば、〈三重〉の仲間に〈走三重〉がある、〈下り〉との関係はほとんどないので、計算に入れていない。但し、木曾最期の〈走三重〉は〈下り〉を伴うので、右の中には入れてある。
- 5 『平曲と平家物語』第二部第三章

付記 本稿は、平成二十五年日本学術振興会科研費・基盤研究（C）「平曲伝承資料の基礎的研究」による成果の一部である。